

土佐のわらべ

第431号《第453回（2017. 11. 9） 子どもの本の読書会記録》参加者5人・文書参加3人

『太陽と月の大地』

コンチャ・ロペス=ナルバエス／著 宇野 和美／訳 福音館書店

16世紀のグラナダ、モリスコ（キリスト教徒に改宗したイスラム教徒）の少年エルナンドは、幼なじみの伯爵令嬢マリアと過ごす夏を楽しみにしていました。しかし、キリスト教徒とイスラム教徒との対立は激しくなり、二人もまたこの大きな流れに巻き込まれていきます。

読書会では今月も様々な感想を聞くことができました。登場人物に寄り添ったものから、宗教や民族、文化に至るまで。自分1人では思いもつかないようなことを聞かされた時に、同じ本を読んで印象に残ったことや深く考えたことなどを語り合う読書会の良さをしみじみと感じました。それでは皆様の感想を紹介します。

・国政に翻弄され戦いに傷つく普通の人々の様子を静かに描くことで、読者に対して直接的に教訓を伝えるよりも、当時を生きた人の悲しみや苦しみが理解できたと感じる。

・遠い国の話だからと距離をとったからかもしれないが、悲劇的な感じはあまり受けなかった。歴史の長いスパンをぎゅっと短くして、内容が濃くスピード感のあるものだった。後半の手紙が気になった。奥様からの手紙が書かれていなかったの、想像が広がった。

・自分のDNAに刻まれたものを無理やり変えられるディエゴの必死さと、代々冷めていく若者との対比が痛い。マリアとエルナンドのエピソードが救いになった。後半の手紙の部分が印象に残った。マリアの老後はどんなものだったのだろうか。

・キリスト教徒の羊飼いが、自分はモリスコに悪いことをしていないから隠れないと言っているけれど、戦争の時は普通のことは普通でなく、むしろ通用しない。日常と非日常の転換が現れていると思った。一番の悲劇は奴隷になること。普通の生活をしていた時には自覚は無いが、こんな場面で誇りある自分を自覚できる。

・宗教の対立が、こんなにも民の心を引き裂くのかと辛かったが、長い人生には縁あって出会った者どうし輝く時がある。それはどんな戦争の時でも同じ。この本には人のもつ普遍的なものが感じられた。

・この物語は今に至る問題を幾つも含んでいる。この本を読んでいる最中に、スペインでは1州の独立問題が起きた。どこの国でも誰もが穏やかに平和な生活を送れる世の中であってほしいと願ってやまない。

・宗教対立の中で、普通の人々に悲劇が襲いかかってくる。そんなことを人間は繰り返し、今この時も世界のあちこちで苦しんでいる人がいっぱいなのだと思ってくる。世界が混沌としている今だから読むべき本なのかも。

歴史の大きな流れの中では、市井の人々の姿は見えにくいものです。けれども、そんな中でも人は悩み苦しむ懸命に生きている、そう気付かせてくれる物語でした。私達は今を生きています。後世の人々が今を振り返った時、懐かしさと共に憧れを抱くような、そんな時代になってほしいものだと思います。

(N. T)